




Special Feature  
Slow Living City

Chapter 8

スローな暮らし、スローな生きかた、スローなまちやコミュニティ……。幅広い視野でスローに考えを巡らすための書籍を選びました。

# 「スロー」を考えるための10冊


Number 1



「日本で最も美しい村」連合  
『日本で最も美しい村——公式ガイドブック』  
ハースト婦人画報社、2012年

地域の集合建屋や世襲財産などを観光資源化し、小規模な農村を保護するために、1982年フランスで生まれた「フランスで最も美しい村」連合。この活動に範をとり、小さくとも美しい日本の農山漁村を守るために誕生した連合の公式ガイド。参加44町村の美しい風景と自慢の美味、見どころを、多数の写真で紹介している。


Number 2



寛 裕介監修  
issue+design project著  
『地域を変えるデザイン——コミュニティが元気になる30のアイデア』  
英治出版、2011年

地域を変えるデザインとは、すなわち人同士をつなぐデザインのこと。日本が抱える多くの問題に対処するための、さまざまな地域の取り組みを紹介し、地域の住民同士、地域と観光客、都市と農村などが、デザインを通じてつながり、新たなコミュニティとコミュニケーションが生まれる可能性を検証する。


Number 3



前川つかさ  
『なにもないシアワセ 大東京ピンボー生活マニュアル』  
イースト・プレス、2011年

6畳一間のアパートに住む、お金はないが時間はある主人公のコースケ。隣に住む学生、大家さん、近所の和尚、パーのママ、銭湯の主、そして彼女……魅力的な周囲の人びととコースケの交流を通じて、まちに暮らす豊かさ、そしてお金には決して還元できない「本当のぜいたく」がわかる不朽の名作漫画。


Number 4



茶谷幸治  
『「まち歩き」をしかける——コミュニティ・ツーリズムの手ほどき』  
学芸出版社、2012年

著者は、ベテランの「まち歩き仕掛け人」であり、2013年夏までに累計16,000人が参加したコミュニティ・ツーリズム「大阪あそ歩」を立ち上げた人。その豊富な経験をもとに、なぜ今まち歩きが必要なのか、仕掛ける側に必要な基本姿勢と具体的なノウハウまで、微に入り細にわたって解説する。


Number 5



平川克美  
『小商いのすすめ——「経済成長」から「縮小均衡」の時代へ』  
ミシマ社、2012年

経済成長なしでも成熟する社会のありかたとは？ 昭和30年代の日本が幸福感に覆われた日々に見えるのはなぜなのか？ グローバル化の潮流のなかで東日本大震災を体験した我々は、未来社会のために、いま一度「ヒューマン・スケール」の復興を目指すべきとの示唆を得られる書。「いま・ここ」に責任をもつ生き方の提唱でもある。

Number 6




島村菜津  
『スローシティ——世界の均質化と闘うイタリアの小さな町』  
光文社新書、2013年

グローバル化した社会では、世界中の町で風景や生活空間の均質化が進む。こうした時代に、人が幸福に暮らす場とは何かということを問いつづける著者は、イタリアで「スローシティ」というひとつの運動に巡り合う。丁寧な取材から、まちのアイデンティティを確立することの大変さ、人びとの強い意志の力を感じ取れる一冊。




Number 7



ウィリアム・モリス著  
川端康雄訳  
『ユートピアだより』  
岩波文庫、2013年

美とともに生活する「アーツ・アンド・クラフツ運動」を推進したデザイナーにして詩人・モリスの思想が集約された小説。産業革命後のイギリスの大量生産・大量消費文明を批判し、自然豊かな「22世紀のロンドン」を活写。芸術としての労働とともに生きる人びとの姿には、スローな暮らしの原点が見える。


Number 8



安藤鶴夫  
『わが落語鑑賞——安藤鶴夫の「読む落語」』  
河出文庫、2009年

ご隠居と熊さん八つあんの呑気な掛け合いが交わされる横丁の縦割り長屋は、大都会・江戸の町なかに実現したスロー空間ではなかったか。噺家たちと深い交流を持ち、江戸落語のエスプリを体で知る最後の粹人、演劇評論家の“アンツル先生”こと安藤鶴夫が紙上に写し取った珠玉の古典落語の数々に笑い、理想郷を夢見よう。


Number 9



辻 信一  
『スロー・イズ・ビューティフル——遅さとしての文化』  
平凡社ライブラリー、2004年

日本のスロー・ブームの嚆矢として2001年に出版されたが、その内容は今も輝きを失っていない。さまざまな職業を経て文化人類学を教える大学教員となった著者が、世界中で出会った人びとの話から、万巻の書から、ゆっくりと掘り起こしてきた「遅恵（スローな知恵）」を達意の文章で開陳。留まって足元を見つめ直さずにはいられない一冊。

Number 10



藻谷浩介、NHK広島取材班  
『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』  
角川oneテーマ21、2013年

過疎化・高齢化が進み、林業は衰退。これまでさんざん見捨てられてきた里山が、脆い日本社会を救うセキュリティシステムになり得る？ 里山が生み出す水・食料・エネルギーの恵みを資本として循環させる「里山資本主義」が、今や夢物語でなく、アクチュアルに実践され得ることを本書が証明する。3.11後を生き抜くヒントが詰まった、福音の書。